



#04

「出会う」

井上 佳暁

インド南部の都市、バンガロール。高層ビルが並ぶインドでも指折りの経済都市も、路地に入ると風景が一変する。でこぼこな未整備な道を歩きながら、次の路地を曲がろうとした。

「市場はこっちだよ!!」

突然の声に後ろを振り向くと、人ごみの向こうで少女が手を振っていた。パッチリとした大きな目、黒い肌に笑った眉毛。大腿で跳びはねるようにしながら駆け寄ってくる。

人ごみを掻き分け、僕のところまでたどり着くと、ひと言。

「迷子にならないでよ」クシャッと笑って、白い歯をのぞかせた。

この街で出会った彼女には僕とは違った過去があった。

ストリートチルドレン。

母親からの虐待、夜の路上生活の寒さ。元ストリートチルドレンということで受けた同級生からのいじめ。そんな彼女の話の1つ1つが僕の胸をぎゅっと締め付けた。人とのつながりや愛情になかなか触れられなかった彼女を救ったもの。それは音楽だった。幼少期に路上で児童保護団体に保護され、その団体にドラムを習ったのがきっかけだった。今では他の保護されたストリートチルドレンとも演奏を行っている。彼女らの演奏を聞いたことがあるが、息がぴったりで、聞いているこっちも無意識にリズムを刻んでしまった。

「音楽は好きだよ!!特にみんなと演奏するのがね。将来の夢はミュージシャン!!」

ちょっと照れくさそうに語る彼女の瞳は、きらきらと眩しかった。僕はそんな彼女のある言葉が忘れられない。

「私は愛を与える人になりたい。そしてしっかり愛を受け止められる人にもなりたい」

いくつもの苦悩を乗り越え、音楽で人とつながりを持てた彼女だからこそ言える言葉だった。

以前、ストリートチルドレンを取り上げたテレビ番組を見たことがあった。子供たちが薄汚れたヨレヨレのTシャツを着て、物乞いや物売りをする映像が映し出された。「世界には現在6000万~1億人のストリートチルドレンがいます。彼らは貧しい家庭環境が原因で路上生活を余儀なくされています。」テレビのナレーションはそう説明した。そしてその後、出演者が可哀想、助けたいと話していた。

番組で言われたように彼らを「可哀想な存在である」と一言でまとめていいのだろうか。僕は違和感を覚えた。だから僕は旅に出た。彼らのことを知るために。

確かに彼らは辛い過去を持っている。でもそれだけじゃないと思う。あの彼女の言葉が、ストリートチルドレンたちの笑い声が蘇ってくるから。「ちょっと待って!今そっちに行くから!!」

少女の元へ駆け寄ると、彼女は力強く僕の手を引いた。いつだって、人と出会うことは新しい発見をくれる。

また旅に出よう。新たな出会いと発見を求めて。



慶應義塾大学公認 学生団体 S.A.L.

| ホームページ | <http://salkeio.com/>

| Twitter アカウント | @sal_keio